
史上最強の兄

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

史上最強の兄

【NZコード】

N1515N

【作者名】

暁

【あらすじ】

ある所に一人の転生者がいた。その男の名前は白浜刃。死亡率がかなり高い「史上最強の弟子ケンイチ」に転生してしまった刃は生き残るために梁山泊に弟子入りするがはたして刃はこの世界で無事生き残れるのか？

BATTLE1 梁山泊！（前書き）

どうも暁です。

これは2作品目なので1作品目のチート転生… もよろしくお願いします。

BATTLE1 梁山泊！！

BATTLE1 梁山泊！！

突然だが俺、白浜刃は転生者である。今のでわかつた人もいるがそうである。転生先は史上最強の弟子ケンイチでしかも兼一の兄に転生しまったのである。これに気づいたときはどれだけ転生させた神？を憎んだか・・・なぜならこの漫画めちゃくちゃ死亡率高いからである。ちなみに刃は兼一の一つ年上で最近荒涼高校に入学したばかりである。またまた突然だが先ほど一つ刃は決意した事がある。それは「梁山泊に入ろう！」・・・今刃の事を馬鹿だと思つたやつがいるかもしれないが刃にも考えがあつた。それはどうせ一年後には兼一によつて巻き込まれてしまふのならそれまでに強くなつとこうというものである。幸い転生するときに神に武術や武器を扱う才能など（ほかにもたくさんあるが）頼んだいでの大丈夫であろう。と言つ事で今は肝心の梁山泊を探しているところである。

「なかなか見つからないな・・・」

史上最強の弟子ケンイチは転生前はよく読んでいたが、さすがに梁山泊の場所はわからないので探しているのだがなかなか見つからない。

（しばらく捜索中）

「あれじゃね！」

しばらく搜索しているとかなり古くてでかい門をみつけた。看板を見ると「梁山泊」と書いてあつた。

「やつとあつた・・・」

意外と探すのに時間がかかったのである。しかしここで一つ刃には不安があつた。それはまず「梁山泊に入門する事ができるのか」というものである。原作では兼一は美羽に紹介してもらつたので難なく梁山泊に入門し弟子入りもできだが刃はそういうのではない。武術の達人にいきなり弟子にしてくださいと言つても弟子してくれれる可能性のほうが低いだろう。しかし転生するときに神に”転生先の原作にはかかわらせる”と言われた事を刃は思い出し早速門の前まで移動した。

どんどん

「だれかいませんか？」

ちなみに門を開けようとしたがビクともしなかつたので素直に誰か中の人あけてもらひう事にした。

𠂔𠂔𠂔

ג'נְדָּע - ?

門が開いたので入ろうとしたが門にぶら下がっている人がいたので驚いてしまった。誰がぶら下がっていたのは言わなくてもわかるだろう。そう“剣と兵器の申し子 香坂しげれ”である。

「なにか・・・ナウヘ?」

驚いて刃だがすぐ持ち直した。

「」の道場の主はいますか？

とつあんずの長老に念むつと聞いてゐる。

「じじいか？まつて・・・う」

じじいと聞いて少し誰の事が考えたがしぐれが長老の事をじじいと呼んでいたことを思い出す。すると奥からでかい老人が歩いてき

た。

「はて？お若いの、梁山泊に何の御用かの？」

「」の道場に入門したくて……」

長老の迫力によつて少しつしまつてしまつ。

「せうかね。どれ、ついて来なされ」

「は、はい」

一人歩き始めた長老の後を刃は追つた。長老の後をついていく途中に何か音が聞こえた。

ズバンズバン

「……」

音がする方向を見ると庭でサンドバックをけつているアパチャイがいた。

「ん、ああ。彼はタイ人のアパチャイ・ホパチャイ君27歳」

さすが達人と思つべきかどんどん庭を破壊してつている。するといきなり長老に口を抑えられた。

「あまり驚かんよう！」喜んで調子に乗るんじゃよ。一いつ一一！やめんかアパチャイ！――！」

しかしアパチャイは聞いてないのか聞こえてないのか庭を破壊し続ける。

「滅多に来ない客なんで少々興奮気味での・・・」

転生してから数年しかたつていないので死ぬかもな・・・と思つた刃だったがこの事は口に出さなかつた。

キンキンドサツ

たまたま剣星とじぐれの戦闘を田撃してしまつたが見なかつたことにじよづと思つた。するといきなり長老が止まつた。

「お前このところで待つておれ今みんなをよんでも来る」

そう言い残し長老はどこか行つた。

（数分後）

ある一部屋に全員が集まつた。

「まずみなを紹介しよう」

そう言い一人ずつ紹介してつた。

「まずケンカ100段の異名をもつ空手家！逆鬼さかき・至緒しお…」

「次に裏ムエタイ界の死神！…アパチャイ・ホパチャイ！…」

「次はあらゆる中国拳法の達人！馬劍星ばけんせい…」

「次は哲学する柔術家！岬越時秋雨！…」

「次は剣と兵器の申し子香坂しぐれ！！」

「そして長老のわし！…そう、ここはスポーツ化した武術になじめない豪傑や、武術を極めてしまった達人たちが共同生活しとる場所じゃ。一人所要で出てるがの。わしらはここを道場と呼ばず、こう呼んである…・梁山泊と！…！」

梁山泊つてしつてるしと思つたけど刃は言わない事にした。

「で、改めて聞け、白浜刃君！入門するかね？我らが梁山泊に！」

！

「強く…・なれるのなら…！」

ここはあえて兼一が入門するさいに言つた言葉を言う刃であった。このとき長老が微笑んだのは大事な収入源ができたからだとは刃は知る余地もない。

「ではここに住所と名前を書いてね」

「はい」

なぜ筆で書くのか?と一瞬おもつたがすぐ書き始めた。

「月謝として一万円いただくな」

「高ツ……」

これだけの達人に一万円程度で学べるなりどんだけ安いのかと思つたがさすがに自分の財布が辛いので高いと言つ事にした。

「……………じやあ一万円ね」

「……………じやあ五千円でいいね」

「ひつ剣星、はしたなこぞ……」

秋雨が剣星に言つが長老が止める。

「実はこの深山泊は今、貧窮を極めて迫つての……まあ、美羽がやりくり上手でなんとかもつているのじやが……」

さつきの紹介に美羽はいなかつたので聞いたく事にした。

「美羽って誰ですか？」

刃がまだ美羽と会つていな」ことに気づいたのか美羽を呼んだ。

「美羽ちよつと来なわいー！」

「はーーい。何でしょうかおじい様？」

すると奥から美羽が出てきた。

「なに、今回入門する白浜刃君を紹介しよつと思つての」

「今回梁山泊に入門する白浜刃です」

「はい、私は風林時美羽です。よろしくお願ひしまし」

最後の語尾が気になつた刃だつたがこゝはあえて何も言わなかつた。

「それで刃さんは何を習いたいんですか？」

「できれば剣がいいんですけど」

「刃が剣が選んだのには理由があったのだ。その理由は・・・
「じぐれさんとおちかずきになりたい！」 という少しくだらないものであった。まあこんな理由になったのは原作の中でじぐれが一番好きだったからである。あと中学から剣道をしているからである。
(ちなみに中2の時には全国大会で準優勝し中3の時には優勝した)
しかしこれは先の理由に比べれば刃にとってみればとても小さいものである。

「ボク・・・?」

少しうれしそうに応じぐれさん。

「おこおい秋雨のほうがいいんじゃねいか？」

「じつけい・・・な」

「おいおい私がね？」

「なる程。秋雨君なら教えるのにも慣れているし、それに他の者だと・・・殺してしまうかもしかんからの・・・」

やつ言いながら顔をそらす長老。

「あの、それならみなさんに教えていただきたいんだですよナビ・・・」

いざれは梁山泊全員に教えていただきたいと思つての口上である。

「俺は弟子はどうねえ主義だ！！」

一番速く反応したのは逆鬼だった。

「しかしのべ、さあがにそうなると死んでしまう可能性が・・・

少し悩む長老。そして何か相談し始めた。

（ 梁山泊の豪傑 side ）

「おこおこわすがに全員は無茶だりつ・・・」

難しい顔をする秋雨。

「秋雨どん拳法で戦いに入り、敵をつかんだら柔術……さらに武器も使える。そんな達人作つてみないかね？」

秋雨にこいつそり言つ剣星。

「ほほう・・・興味が無いと言えばウソになるな・・・しかしそれでは弟子の体がもつかな？」

「失敗をおそれちゃ進歩はないね」

「さらにムエタイも加えれば最強よ！」

話に加わつてくるアパチャイ。

「そりゃ、君は弟子を持ったことはなかつたつけ。」

確認する秋雨。

「やつよ何事も経験よー。」

嬉しそうに言うアパチャイ。

「しぐれどんもやるかね？」

しぐれに剣星が聞いてみる。

「う・・・ん」

どこのか嬉しそうなしぐれ。

「で、どうするかね？逆鬼どん。なあに潰れたらモレまでの弟子だ
つたところ」「とで、あきらめがつくねー。」

逆鬼にせまる剣星。

「わ、わかったよ。弟子はとうねえ主義だが今日は特別だぞ・・・」

しぶしぶ弟子にする事を認める逆鬼。

「素直じゃないね~逆鬼じんせ」

「うむー。」

殴りつとある逆鬼の拳をよける剣星。

「ではやつてみるか」

そんな様子を無視し話を進める秋雨。

「あぱー。」

「昔から”弟子は生かず死なず”といつしね・・・」

戻ってきた剣星も言ひ。

（ 梁山泊の豪傑 end ）

「話は終わりましたか？」

ずっと待っていた刃が嫌な汗をかきながら言つ。なぜならまさか本当に全員がこんな早く師匠になるとは思わなかつたからである。

「これからは俺の事は師匠と呼べ」

やつまつ逆鬼。

「はい！逆鬼師匠」

このあと逆鬼が照れたのは言つまでもない。

「おいやさんの事は師父と呼ぶね」

「わかりました馬師父」

「私の事は好きなように呼びなさい」

「はい！岬越時師匠」

「アパチャイはアパチャイよー。」

「はい！アパチャイさん」

「ボクは・・・しぐれでい・・・い」

「はい！・・・しぐれさん」

「ん・・・ん」

しぐれが照れた。

「では早速始めるか・・・」

このあと刃が見るも無残な姿になつた事は言つまでもない。

BATTLE 1

梁山泊！！（後書き）

新島式主人公設定 + * 梁山泊に弟子入り前

名前 白浜 刃

荒涼高校1年生

成績 上の中

運動神経 上の上

ルックス 上(カツコイイ系)

体格 上の下

ケンカ指数 上

根性 上の中

部活 剣道部 * 中学の頃、全国大会に出場

中2準優勝 中3優勝

総合評価 A +

ランク ライオン級

BATTLE2 白浜 元次の苦悩---（前書き）

どうも暁です。
チート転生---と同時連載ができるだけ早く更新していきたい
と思います。

BATTLE2 白浜 元次の苦悩！！

BATTLE2 白浜 元次の苦悩！！

とある日、刃は一つの失敗をしてしまった。それは梁山泊の修行が終わり家に帰ってきたまでは良かったが玄関で力尽きてしまい氣絶してしまった事だ。いつもなら、どんなに疲れていてもどんなに体が痛くてもどうにか自分の部屋までは行くのである。それがどうした?と思う人がいるかむしれないが白浜家では大問題なのである。氣絶していた所をさおりや兼^母^弟^妹一やほのかに見つかったのならまだ問題程度だったが元次^父に見つかってしまったから大問題なのである。ちなみに刃はその大問題にちょうど直面していた。

「刃、自分のおじいかいでどここの道場で剣道を習ひのかはお前の自由かもしれない!しかし、こうも毎日傷だらけで帰つてくると・・・その剣道の道場、まともなところのかじさか疑問だな・・・」

テーブルの周りには神妙な顔つきで言つ元次と黙つてお茶を出すおりと心配そうに見つめる兼一とほのかがいた。

「・・・・・・まともではない・・・・」

慎重に言葉を選びながら言う刃。

「……」

その言葉に驚く元次。まさかまともではないといつてこの言葉が返つてくれるとは思つていなかつたのだろう。

「…………でも・・・・世ともでは無理なんだーーー！」

そういうながら席を立ち、立ち去る刃。今言つた言葉は刃の本当の気持ちである。なぜなら、もし、今までどおり普通の道場に通い普通に剣道を習つていては少なくとも一年ちょっとこなは死ぬ可能性があるからである。最初の数ヶ月は戦うとしても相手は強くても不良レベルでの最強だかその後は達人級マスタークラスの師匠を持つている弟子が出てくる。そうなつたら下手したら一撃で死ぬ事になるからである。そう考えるとどうしても梁山泊で修行する必要があるからである。

「ああ、待つて兄さん・・・・」

気が弱い兼一はどうしても強くいえない。

「待つてよお兄ちゃんーーー！」

ほのかは立ち去る刃のあとを追つた。

「…………」

しかし元次はその様子をただ黙つて見つめていた。ここで元次はさおりに話しかけた。

「かあさん

「はい、あなた」

今の短い会話だけでわかつたのか、返事をするさおり。

「びびびびびびひよひーーねえ?..びひよひー?息子が大ピンチ!...息子を・・・息子を守らなきや!...」

れつきまでの様子とはいっぺん、一気に取り乱す元次。今の変わりつぶりをみたら誰もが驚くだろ?。これでわかつてただろ?。元次はかなりの親馬鹿なのである。

「あの子が自分で選んだ道場です。あの子を信じましょ?」

そんな元次の様子にいたつて冷静に対処するもあり。いつももさおりが冷静に対処できるのも、これはよくある事だからである。

「ぐわーっ！－またそんな事言つて、悪徳道場だつたらどうする－？大事な息子に命がーっ！－」

いたつて冷静に対処するもありおよそに一人叫びながらじたばたする元次。

「やうだよー－いつそひと思いに道場の奴らを・・・つて言つのはどう？」

そう獵銃のセバスチャンに話しかけながら何かに取り付かれたように弾をこめる元次。なぜ獵銃があるのか、と思う人がいるかもしれないが元次はクレーン射撃をよくやるのである。しかも、かなりの腕前だ。

「あなた！－」

そんな元次にも動じず一聲で止めるもあり。

「あの子が中学生になつて初めて自分からしたいつて言つた剣道を

一生懸命頑張つているんです。だから今は信じてあげましょう。私とあなたの子じゃありませんか？」

そうさおりに言われ元次は「セバスチャンハウス！！」と叫びながらセバスチャンをセバスチャンハウスと書かれた箱にします。

「やうだなさおりーーあいつこはわしらの血が流れてるんだもんなーー！」

そう言いながら手を組み合つ元次とさおりだがこの時さおりが「あなたの血の分が少し心配・・・」と思つた事は元次が知るはずもない・・・

BATTLE 2

白浜 元次の苦悩…（後書き）

新島のガクランデータ +

* 梁山泊に弟子入り前

名前 白浜 兼一

あだ名 フヌケン（フヌケの兼一でフヌケン）

荒涼高校1年生

成績 中の下

運動神経 中の下

ルックス 中

体格 中の下

ケンカ指数 下

根性 下の下

部活 空手部

総合評価 E -

ランク 虫ケラ級

BATTLE 3 練習試合ーー（前書き）

どうも暁です。

最近パソコンの調子が悪く更新が少し遅れてしまいました。これか
らはもう少し早く更新できるようにしたいと思いますが夏休みも終
わってしまったのでやはり更新が遅くなるかもしれませんがこれか
らも頑張って更新していきたいと思います。

BATTLE3 練習試合ーー！

BATTLE3 練習試合ーー！

「静かにー！」

主将の声で全員が止まる。ちなみに今はちょうど剣道部の稽古が終わつたところだ。荒涼高校の剣道部では実力主義らしく入部したばかりの一年生は稽古はほとんどさせてもう掃除ばかりさせられている。これは中学で全国優勝していた刃も例外ではない。

「これから一年生との練習試合を始める。一年生達は今持つてゐる力を出しきるよーにー！」

しかし今回は一年生の実力を見るための練習試合があった。これは先輩達が入部したばかりの一年生が調子こかないように痛めつけるのが本音だが、そんな事は知らない一年生は「俺の実力を見てやるー！」とか「○○先輩とやりたい！」とかい言つてはしゃいでいる。

「では一年生は準備ができた者から年、組、名前を言つて相手を選んでくれー！」

今回の練習試合では一年生が先輩達の中から相手を自由に選べるらしく、たとえ主将だろうが指名すれば相手してもらえるらしい。だからなのか一年生の半分近くは相手に主将を選んでいる。まあ「この練習試合で主将に実力を見せて自分も練習に加わるぞ！」とか言うのが多くの本音だが・・・

「はい！一年〇組の〇〇です！〇〇先輩お願いします！！」

早速一人目が出たが結果は言わなくてもわかるが一回もあたらず負けてしまった。しかし一人目が出たと言う事で一人また一人と挑戦していく。しかし、ここでまだ動いてない人の考えは二つに分かれうるだろう。一つ目は「人数が多いので最後の方でいいや・・・」と言つ考への人だ。二つ目は「最後の方なら先輩もさすがに疲れてて自分で当てる事ができるだろう・・・」という新島みたいな考へを持つてゐる人だろう。ちなみに刃は一つ目の考へだ。

「次は誰だ！」

しかし先輩の多くはそんな考へは見通しており、軽くあしらう程度しか力を出していない。まあ数人、いわゆるアパチャイみみたいな手加減が苦手なタイプの人は後先考へず全力で相手しているが・・・

「残りはお前達だけだぞ！どつちが先だ？」

始まつて三十分せず残りは一人だけとなつた。しかしこれまでに何十人も相手しているはずの主将はあまり疲れている様子は見せていない。この様子を見て主将田当てで残っていたもう一人は焦つていた。

「じゃあ俺が行きます！」

しかし刃は「人数が多いので最後の方でいいや・・・」と考えていたので先にやることにした。しかしこれによつてもう一人のほうはさらに焦つていた。まあ簡単に言えばさすがに最後はいろんな意味で目立つから嫌だからだろ？。

「お、俺が先にやります！――一年一組、土方 敏明ひじかた としあきです！主将お願いします！――」

本来かなりの実力があり、いつもの調子でいけたなら一回ぐらいはあたつたかもしれないが焦つっていた事もあり、かすりもせず負けてしまつた。まあこの人物が一年後に副将になつた事で”鬼の副将”と呼ばれるようになつた事やあだ名がもちろん”とし”になつたのは銀魂に影響されたからという事はまた別の話である。

「お前で最後だ！」

「一年一組、白浜しらはま 刃やいばです！主将お願いします！」

もちろん刃が相手に選んだのは主将である。なぜなら梁山泊でまだ短い間だが鍛えられた自分の実力はどれくらいなのか少なからずとも気になっていたからである。まああと数ヶ月もたてば梁山泊で鍛えられている刃にかなう一般人はいなくなるが今ならまだ刃と少なくとも互角には相手できるだろつ。

「では・・・はじめ!」

はじめ!と言われてもまだ一人とも距離はつめずある程度の間隔をあけて動いている。どちらも相手の出方をうかがっているからである。そんな様子に先に痺れを切らした主将が攻めてきた。

「やあ!――」

しかし田じろ梁山泊で師匠たちの動きを見ている刃にとつてはかなり遅く見えたがここは無難に竹刀の側面を使って竹刀を受け流し、また距離をとつた。しかしその様子を見て主将は「刃は攻める気はない」と考え一気に攻めてきた。

面、胴、小手と順番に狙つていいくもどれも受け流され、もしくはあ

ガシ!ガシ!ヒュッ

たらなかつた。しかしこれによつて少なからずとも主将はあせり始めた。なぜなら一年生に負けてしまつたら荒涼高校の主将としてのメンツが丸つぶれだからである。しかしへゞで焦つたのが致命傷になつた。

「面……」

刃は主将が焦つた隙に面を狙つたが途中でわざと外し大きな隙をわざと作った。まあ「さすがに主将が一年生に負けるのはやばいんじやないのか・・・」と思つたからわざとはずしたのである。まあその後は狙い通り主将は面を狙つた一撃を防ぎ刃がわざと作った隙についてこの試合は終わつた。そして今日の稽古は刃と主将との練習試合で終わつた。

（部活終了後）

今はもう部活も終わり、もう他の生徒はほとんど帰つていて今残っている生徒は数人しかいなかつた。そのときいきなり主将に話しかけられた。

「ちょっと聞きたい事があるんだがいいか？」

「はっはい・・・なんですか主将？」

この時刃は驚いてた。まあ、まだ入部して間もない一年生がいきなり主将に話しかけられれば誰でも驚くと思つ。しかもその上聞きたい事があると言えばなおさらだが……

「そつときの試合でだが……なぜ最後わざとはずしたんだ？」

「！？・・・何の事ですか？」

刃はさらに驚く事になつた。なぜならまさか最後の一撃をわざと外した事に気づいた人はいなかつたと思っていたからだ。その証拠に副主将などは「主将、最後の一撃危なかつたよな！」と言つた生徒に対しても「主将はわざと危ない不利をしたんだ!!!!」と言つていた。・・・いや怒鳴つていた。

「シラをかる氣かい？最後の一撃はあのままいけば決まつていた。
それをお前はわざと外した・・・違うかい？」

「・・・・・・・・・・・・」

万事休すかと思つたがある人物によつて助けられる事になつた。

「刃！一緒に帰ろうぜ！・・・主将！？失礼しました！――」

その人物とは「とし」つまり敏明だった。としは刃は主将と話していたとと氣づくと急いで逃げるようになり立ち去りうとしたが、刃もこの状況から逃れるチャンスを逃がさないために藁をもつかむ思いでとしを引き止めた。

「としー!待てーーー!」

その一声にとしは一度止まって振り返ったが、なぜか「お前の犠牲は忘れない!」と言つて走り去った。

「しゅ、主将・・・もう行つていいですか?」

頼みのとしも主将と言ひ強敵を前に敵前逃亡をしてしまったので何とかこれをネタに逃げよつとしたが、「今回はこれぐらいで勘弁してやる」と言つて素直に開放してくれた。こうも素直に帰らせてくれたということに少し驚き少しごまつてしまつたが次の「また今度。今度はじつくりと邪魔が入らない所で二人きりで話し合おうじやないか・・・」という主将の言葉を聞いた瞬間、固まっていた体を動かし急いで裏切り者の後を追つた。

BATTLE 3 練習試合--! (後書き)

新島のガクランデータ + * 練習試合時点

名前 土方 敏明
ひじかた としあき

荒涼高校一年生

成績 上の下

運動神経 上の中

ルックス 上（結構銀魂の土方に似ている）

体格 中の中

ケンカ指数 中

根性 中の下（試合時のみ上）

部活 剣道部

総合評価 B +

ランク 虎級

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1515n/>

史上最強の兄

2010年12月9日13時39分発行